慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	イラン雑感
Sub Title	A brief report on Iran (1976.10-1977.3)
Author	坂本, 勉(Sakamoto, Tsutomu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1979
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.49, No.2/3 (1979. 6) ,p.123(233)- 141(251)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	報告
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19790600-0123

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

イラン雑感

坂本　勉

飛行機が、機体を降下しはじめると、朝日に輝くデマーベント山の麓に、テヘランの町がひろがっていた。夜の眠りから覚めたばかりの町に、車が小さなおもちゃのように往来（ゆきき）していた。整然と区画された市街、緑に彩（いろど）られた郊外の畑は、ニューデリーを飛びたってから、ずっと褐色のイラン高原だけを見せられてきた目に、妙に新鮮に映った。

私がはじめてテヘランの土を踏んだのは、二年半前、昭和五一年一〇月六日のことである。緊張した気持でメフラーバード空港に降りたったことを思い出す。しかし、その不安もすぐに鎮まった。車の猛烈なクラクションの音と渋滞、テヘラン市民の仕事に急ぐ姿――こうしたイラン人の、朝の日常生活の一端を、シャーヤード（ホメイニ）広場からシャーレーザー通りに抜ける沿道で見るにつけ、喧噪に満ちたテヘランの町に親しみを覚えてきた。違和感は遠のき、かえって、イラン人の生活の中に入りこめる自信がわいてきた。日本を発つ前に感じていた心配が、杞憂であることを喜んだ。

私は、慶応義塾・福沢基金によって昭和五一年一〇月から昭年五二年三月までテヘランに滞在し、その後、昭和五三年三月までケンブリッジ大学附属中東センター・同東洋学部に留学する機会を与えられた。当時のイランに、まだ革命の嵐は吹きあれていなかった。社会は、一応、表面的には平静を保っていた。パトロールする警官の数の多さと政治問題にいちように口をつぐむイラン人の表情に締めつけの厳しさを感じる程度であった。

私は、ここでイランに滞在していたときの体験を「イラ

ン雑感」と題して印象記風に報告することにしたい。イランの学界事情とイギリス留学時の体験は、改めて発表するつもりである。

＊　＊　＊

テヘランに到着した翌日、私は、科学高等教育省（vezārat-e ʻolūm o āmūzesh-e ʻālī）に出むいて手続をとった。イランは、研究者の登録制度をとっている。イラン国内で研究・調査・留学を希望する外国人研究者は、科学高等教育省に申請を出して許可をうけなければ、研究ができないことになっている。ちょうど商社など、企業の海外駐在員が「労働許可」（work permit）を取得しなければ、働くことができないのと同じシステムである。この制度は、外国人研究者のテーマがパーレビー体制の利益を侵す恐れがあるか、どうかをチェックする意味合いをもつ。この検閲の総元締の政府機関が、科学高等教育省であった。

もともと、この省は、高等教育を指導・監督する趣旨で設立された。パーレビー体制最後の首相・バフティヤール氏は、大学を管理するものとしてこの省の存在を非難する学生の声にたいし、廃止を公約した。バフティヤール氏は、これによって学生の反政府運動の力をそぐことを意図したのである。しかし、この省は、公約にもかかわらず廃止されなかった。イラン革命が成功したあとでも、この省は依然、存続している。ホメイニ師のシーア派宗教グループと学生の左翼組織による統一戦線にひびが入ってくると、前者は後者の独走を抑えるためにこの省を必要とした。その結果として、コムの宗教指導者の重鎮シャリアト・マダリ師が、この省の大臣に就任した。

私は、今度のイラン滞在の目的を一九世紀イランの地方史――とくにイスファハーンに関する史料の蒐集と研究状況の把握においていた。この機会を利用して各地のバーザールを見てまわりたいと思っていた。私のテーマにたいする「研究許可」（research permit）は比較的スムーズにおりた。官庁事務の能率の悪さで評判の高いイランでは珍らしいことである、と手伝ってくれた知人に言われた。私の場合、すでに麻布にある在日イラン大使館に申請書類を

提出し、本国に照会がいって仮許可が出されていたので、早く取得できたのである。とにかく、この「研究許可」を手にして、イランでの私の身分が保証された。私は、これをもって、かねて手紙で連絡してあったテヘラン大学文学部のイーラージ・アフシャール教授を訪ねた。アフシャール教授の計らいで中央図書館をはじめとするテヘラン大学の研究施設も使って勉強することができるようになった。

「研究許可」は、確かに検閲制度の一面をもつ。しかし、他面においてこれを取得した暁には政府公認のお墨付として絶大な威力を発揮する。研究テーマに応じて、科学高等教育省は関係機関に紹介状を出し、数々の便宜を与えてくれるからである。私は、イスファハーンでこの恩恵に浴した。バーザールのことで文化財保護委員会（sāzmān-e melli-ye ḥefāzat-e āthār-e bāstānī）のシーラージー氏をはじめとする方々にお世話になった。

＊　＊　＊

テヘランでの生活は、ペンションに居を定めることからはじまった。ペンションとは、長期滞在者用の比較的低廉なホテル、ないしは下宿屋のことである。テヘランの住宅事情は、きわめて悪い。都市への人口集中と外国人の急増とによって、住宅の絶対数の不足、家賃の高騰を招いている。私は、当初、ふつうのアパートを貸りるつもりでいた。が、適当な空室を見つけることができず、結局、最後までペンションに身を落着けることになった。ペンションは、自炊が思うようにできない点を除けば、家賃、その他でアパートとそれほど大差がない。私が住んでいたペンションは、ケント・ペンションといった。住所は、シャールード小路六番地である。テヘランの町を東西に縦貫するシャーレザー通りは、同時に北部の山手地区と南部の下町地区を分ける通りでもある。ペンションは、この通りが町のほぼ中央にあるフェルドゥーシー広場に突き当るあたりにあった。交通至便なところでテヘラン大学には、バスに一〇分も乗れば行くことができ、南にフェルドゥーシー通りを下りていけば、イスタンブール街、セパ広場など下町の繁華街に足を伸ばすことができた。山手と下町の接点をなす地区で、テヘランの二つの顔を観察できる面白いところ

であった。シャーレザー通りに面した三井物産ビルの脇をちょっと入ったところにあったので、比較的静かであった。ただ朝は六時前から外が騒しくなる。イラン人は早起きで、この時間帯から仕事に出かける車のラッシュがはじまるのである。昭和五三年一二月のアーシューラーの殉教デモのときには、フェルドゥーシー広場、シャーレザー通りが、人で埋めつくされたと聞く。それほどこの附近は、大テヘランの重要な動脈なのである。

ケント・ペンションには私と同じような長期滞在者が幾人かいた。私が親しく話をし、付合った人たちを紹介しよう。

前田嘉道氏は、大阪大学・工学部発酸酵工学教室に所属する日本人学者である。氏は、コロンボ計画によりアールヤメフル工科大学に客員助教授として招聘され、衛生工学を教えていた。一年半もここにいるので、情報に詳しく、このペンションの経営者が、パーレビー前国王の親戚筋にあたることなど、ペンション内部の事情、生活のイロハを教えてもらった。教育、研究の暇をみつけては、イラン各地から水を採取し、水質の分析を行っていた。私がアゼルバイジャンを旅行した折、ウルミヤ湖の水の採取を依頼されたが、モンゴル時代の旧都・マラーガまでいきながらウルミヤ湖岸にとうとう行くことができなかった。前田氏のような、水質の分析という地味な分野でイランと関わりをもとうとする自然科学者の熱意に応えられなかったことを後悔している。

モハンマド君は、アゼルバイジャンのレザーイエ出身のトルコ系の学生である。タブリーズ大学法学部を卒業して、テヘラン大学・大学院に通っていた。やはり下宿先が見つからず、ここに長期滞在していた一人である。住宅事情の悪化は、こういう地方から上京してきたイラン人にもしわ寄せが来ている。モハンマド君は、トルコ系を自称するが、風貌はクルドの血が濃く入っている印象をうけた。母語は、もちろんトルコ語方言のアゼリーである。しかし、当然のことながらペルシャ語も話すバイリンガルである。彼は、私のたどたどしいペルシャ語の練習台になってくれた。

ジャック・モア氏は、アメリカ人である。氏は、地理学を修めた人で、イラン政府・運輸省の交通顧問をしているということであった。イランに来る前、台湾にいたというから世上言われるところのアメリカの要員の一人であったかもしれない。しかし、氏はなかなか気さくで親切、よく話しかけてくれた。実現はしなかったが、エルブルズ山麓のスキー場に一緒に遊びに行こうなどとも誘ってくれた。よくペンションの人間を集めては、氏が世界各地で撮影したスライドの映写会を開いて楽しませてくれた。

この他、テヘランの高校に通うフランス人の兄妹がいたが、名前は失念した。時々、親が本国から会いに来ていたけれども、どういう事情でテヘランに滞在しているのか、立入ったことも聞かず、最後までふつうの会話をかわすにすぎなかった。

ペンションでは、朝食だけがついた。イラン独特の酵母のはいっていないパン＝ヌーンにバター、ジャム、チーズ、紅茶だけつく質素なものであった。しかし、焼いてから時間の経っていない、温かくて香ばしさのあるヌーンがありさえすれば、これで十分であった。同宿人が顔を合せる朝食時は、話をするいい機会であった。私の部屋は、六畳ほどの広さでシャワーが付き、ベッドと机があった。ハマダーン出身のおばさんが、三日に一度くらいシーツを換えてくれた。子供が、マドラセ（神学校）に通っているということであったが、信仰心の厚そうな穏かな人であった。マシュハド出身のホセイン、ロンドンにいたことのあるハサンは、ボーイである。どちらも素朴で親切心にあふれたイラン人であった。かれらとの会話は、いいペルシャ語の勉強になった。狭いながらも、ペンション暮しは、結構、住みごこちのよいものであった。

だが、テヘランでの生活は、インフレの進行でかかりが多すぎ、この点で暮しにくい。本代、地方に旅行に出かけたときの旅費を除いても、月に二〇万円以上の出費を覚悟しなければならなかった。このうち半分以上の一二万円が、ペンションの家賃として消える。テヘランの住居費の高さは、驚くほかない。このペンションが、とくに高いというわけでもなく、アパートでもこの程度は相場なのであ

る。住居費の異常な高騰は、テヘラン特有の現象である。

テヘランには、市内の交通機関としての鉄道はない。市民は、もっぱら自動車を頼りとする。イギリス・レイランド社製の二階建て、緑色のバスが、二リアル（一リアルは四円の換算）の安い料金で市内のあちこちを走っている。だが、これも道路の渋滞で運行は時間通りにいかない。そこでこれに代ってよく利用されるのが、オレンジ色の車体をした相乗りタクシーである。これなら運転手の抜群の運転技術（？）で割込みがきいて早いというわけである。

テヘランの乱暴な運転振りは、世界一という評判があるほどだから、タクシーの車体は、どれもあちこちデコボコに潰れている。交差点での信号無視、青に信号が変ったときのダッシュの猛烈さ、通行人が、車のボンネットにのせられるということは、それこそ日常的な光景なのである。おまけに車の洪水と排気ガス、「美わしき高原都市・テヘラン」とはどこのことやらと首をかしげたくなる。

タクシーは五人まで客を相乗りさせる。道路の端に立ちながら大きな声で行先を叫んでいる客を、方角が合えば拾っていく。はじめ慣れないと尻込みするが、ペルシャ語が、少しできればごまかされることもなく、誠に便利な足となる。メーターがついていないが、テヘランだと二〇リアルが相場、地方都市だと若干、安い。ヤズドのように五リアルのところもある。

イスファハーンのような観光都市だと外国人とみれば、倍以上にふっかけてくることも珍らしくない。このような時、私たちがしなければならぬことは、すかさず運転手の言い値に逆襲をかけ、時に必要とあらば所構わず、大きな声で徹底的に抗議することである。おとなしく引きさがることは、イランのような社会では負けだけが用意される。

白タクは、テヘランのような大都会でもかなり公然と行なわれている。これは、悪質なのもいるので、用心しなければいけないが、地方に出ると普通の自家用車が金をとって相乗りさせるということは、日常的な行為である。むしろ、バスの便が少い辺鄙なところでは、欠かすことのできぬ交通手段ですらある。

テヘランの東、ホラサン州のダムガンに行った時のこと

である。この町から西のセムナンの町に行こうと思った。生憎(あいに)く、ハサン殉教の日にぶつかり、バスの運転が休みであった。そこで、たまたま通りかかった車に便乗させてもらい、セムナンの町に着いたことがある。このような時でもイラン人には、ヒッチハイク精神は通用しない。乗せることは、契約であって、金はとるべきものなのである。

旅行に出れば、長距離バスの世話になる。鉄道が未発達のイランで、バスが交通体系の中で占める位置は絶対的である。豊富な石油資源のおかげで、バス料金はきわめて安い。四大・大手バス会社のひとつT・B・Tのバスにテヘラン――ダブリーズ間六五〇キロ、一〇時間の行程を乗っても、三六〇リアル（＝約一六〇〇円）にしかならない。バスの旅は、さまざまなイラン人と接触できて楽しいものであった。

＊　＊　＊

食事と料理の問題に触れてみよう。イラン料理は、古代・中世を通じてコムギと羊を基調にした食事文化であった。オアシスの農民が、灌漑された畑でつくるコムギと遊牧民が飼養する羊肉、乳製品は、イラン料理の性格を規定していた。この傾向は、基本的には現代においても大きく変っていない。

だが、現代では、食肉の材料が違う。一九七三年の第五次五ケ年計画以降、イランは食糧自給を放棄し、食肉生産の面でも伝統的な羊の放牧、飼養に代って、オーストラリアなどからの輸入牛肉に依存することになった。テヘランのような大都会で羊肉にめぐり会う機会は、めったにない。地方に出かけて羊を屠(ほう)る幸運にでも遭遇しないかぎり、羊肉を口にすることはできなくなった。羊肉の代表的な料理である串に刺して焼いたキャバーブ（カバブ）の材料は、今や、ほとんど牛肉というのが実情である。

キャバーブのことを、私たちは別にシシキャバーブとも呼ぶ。シシ shish とはトルコ語で焼串のことをいう。この語源からも分るように羊肉を青唐辛子、トマトといっしょに串に刺し、炭火で焼く料理法はトルコの方が栄んである。また、事実、美味である。トルコでもクルド、トルコマン系の遊牧民が多く住む東部アナトリアのウルファ、ア

ダナがキャバーブでその名を知られている。私は、ケンブリッジ留学中、冬休みを利用して一ケ月にわたりトルコ全土を旅行したことがある。その折、チグリス上流域の町ディヤールバクル、マルディン、ウルファで食べたシシキャバーブの旨さを今でも忘れがたく覚えている。わけぎのような生の細い葱をかじりかじり、唐辛子の辛さに涙を流しながら食べるシシキャバーブの味は、野趣豊かなものであった。

イラン人もトルコ人同様、シシキャバーブに限りない愛着を寄せている。だが、イランのキャバーブ屋で見かけるのは、ふつうヒレ肉とか肩肉とかを焼いたシシキャバーブでない。挽肉を材料としたクービーデ kūbīdeh といわれるものである。挽肉の臭みを消すため、おろした玉葱と香辛料を挽肉にまぜ、肉の色がほとんど白くなるまで叩く。それを鉄の平串に塗りつけて焼くのがクービーデである。臭いが、完全に消えず、したたり落ちる油も悪いが、安価であるため大衆的キャバーブとして人気がある。

クービーデは、このままで食べることは少い。これをトマト、生の玉葱といっしょに皿の大きさほどの薄いヌーンにくるんで食べる。いうなればイラン製の特大ハンバーガーである。五〇リアルも出せば食べられる。キャブーブの材料は、羊、牛の肉だけでなく、鶏肉のこともある。カスピ海沿岸地方に行けば、魚だって使われる。ジュージェ（鶏）・キャバーブ、マーヒー（魚）・キャバーブが、それである。

以上のようにイラン料理の基本的な肉の調理法の一つは、まず焼くことである。しかし、庶民が肉を日常、絶えず口にできるわけでない。そこで、ホレシュトという一種のシチュー料理を発達させてきた。野菜、果物、ナッツ、穀物を肉といっしょに長い時間をかけて煮こんだものである。この料理は、香辛料の味つけに秘訣があるらしく、日本人に馴染みのない、いわく言い難い味がするが、慣れるとこれがなかなかに捨てがたい。

主食の王座を占めてきたのは、長いことヌーンであった。朝、昼、晩の三度、テヘランの街角のそちこちのヌーン屋のかまどから香ばしい、いい匂いが漂ってくる。テヘ

ランの人々は、五リアルの硬貨を握りしめ、温かい、焼きたてのヌーンを買おうと店先に列をつくる。職人が、小麦粉を薄く練り、それを台にのせ、赤々と燃えさかるかまどの中にほうり込んで焼きあげるのを、じっと待つのである。ヌーンを食べた経験のない人は、皿のような平べたい形をしたヌーンを異様と感じるかもしれないが、温かいうちのヌーンは、やわらかくて、口の中に香ばしさがひろがり、他のパンの追随を許さない。

何時のころかはっきりしないが、比較的新しい時代にカスピ海南岸のギーラーン、マーザンダランの両地方に稲が移植された。三つの品種が、もたらされたといわれる。berenj-e domiāh、berenj-e ṣadrī、berenj-e champā である。最後のものは、ベトナム・カンボジャ系のいわゆる史上有名な占城(チャンパ)米である。水田による稲作の開始は、イランの食事文化に革新をもたらした。米が、イラン人の嗜好に欠かせないものとなってきたからである。

イランの米は、細長くて臭いのある、日本でいう外米である。日本人は、戦後の食糧難によって緊急輸入された東南アジア産の外米で辟易した苦い経験があるため、これを嫌う人が多い。しかし、イラン人が丹誠こめて炊きあげた米を口にするならば、偏見は、いっぺんにふきとんでしまう。それほどまで米をふんわりと、やわらかく炊きあげるのである。臭いを香りにまで芸術的に高めてしまう。臭覚に心持よい満足感すら与えるのである。

イランの米の炊き方は日本と比較にならないくらい手をかける。まず、ぬるま湯で米を三回とぎ、塩を加えた冷水に一晩つけておく。翌朝、沸騰した湯に、さらに塩を加え、米をこの中に入れて一五分ほど煮たさせる。次に、これをざるにあけ、ぬるま湯ですすぎ、のりけをとる。これが済むと、バターを溶かした釜の中に米を再び入れ、約一時間近く弱火で炊きあげる。イラン人は、釜の底にできたおこげが大好物である。ペルシャ語でタドリーク tadrik いうが、バターの脂(あぶら)が適度に浸みこみ、こんがりと焼きあとがったおこげは確かに美味である。

米料理は、イラン人にとっていちばんのごちそうである。材料との組合せで大きく二つの種類に分けられる。

一つはチェロ chelo である。炊いた白米を皿に盛り、その上にキャバーブをのせたり、ホレシュトをかけて食べる料理のことである。

あと一つの米料理は、ポロ polo である。いわゆる、まぜ御飯、ピラフのことで、乾ぶどう、レンズ豆、サフランなどいろいろな材料をまぜる。

種類の豊富な米料理を前にすると、イランの食生活の中で米が、ヌーンから主食の地位を奪っているような錯覚におちいる。確かにチェロとかポロとかの料理において米は主食の観がある。しかし、大部分のイラン人にとって一〇〇～一五〇リアルもするこれらの料理を食べる機会は、そうたびたびあるわけでない。カスピ海の稲作によって米料理の占める割合が、西アジアの他のどの国よりも高くなったとはいえ、イランは、やはりヌーンのコムギ文化の国である。

イランを旅していると、チャイハーネ（茶館）で飲む一杯の紅茶は、喉の渇きをいやしてくれ、水というものがつくづく有難いと思う。小さなチューリップ型のグラスを手にしながら、固い砂糖のかたまり（qand）を口に含みつつ飲む茶は、たとえ芳香に乏しくとも喉に滲みわたるものである。

イランで喫茶の習慣がはじまったのは、そう古いことでなく、せいぜい一九世紀のことである。ギーラン地方での茶の栽培にはじまるといわれる。

一九世紀に茶を飲む習慣が出てきた当初、イラン人のあいだでチャイハーネ（茶館）は、忌むべきもの、不愉快で恥ずべきものと考えられていた節がある。一九世紀後半に編集された『イスファハーン地誌』によると、この町にあった数軒のチャイハーネは、イスファハーンの人たちが嫌って近づかなかったと伝えている。

これが真実であったとすると、今まで唱えられてきたチャイハーネの役割を再検討する必要が出てくる。庶民が意見をたたかわす場所、時として反政府活動の密議がこらされた所――というチャイハーネをコミュニティー・サークルとして評価する考え方は、果してイランの場合にあてはまるのであろうか。トルコやエジプトを旅して、イランと

比較すると一層、この感を深くする。トルコ、エジプトの人々は、チャイハーネに好んでたむろし、一杯の茶を傾けながら、トランプ遊びや将棋を指すのに興じている。しかし、イランでは、現代においてであるが、チャイハーネの軒数そのものが多くなく、トルコ、エジプトほどには、世論を形成する地域の集会の場としての機能が活発でないように見えるのである。

＊　＊　＊

テヘランの冬は、秋を飛び越して大急ぎでやってきた。十月中旬ならば日中は半袖のワイシャツで過せたが、月末に雷が二、三度鳴って雨がぱらつくと、外出にコートが欠かせなくなってきた。十一月にはいると、北に連なるエルブルズの山なみは、雪化粧で真白になった。下旬には、街路樹の葉がすっかり落ちて、道路に舞っていた。それから一ケ月もたたぬうちに、初雪が降った。五センチほどの粉雪であった。

このころになると、私は、すっかりテヘランの生活に慣れてきた。一度は経験すると脅かされていた水が原因の下痢も、腹がゴロゴロする程度ですんだ。午前中、テヘラン大学に通い、午後は大学の前に並ぶ本屋街を覗いたり、町をぶらついたりした。

テヘランの町は、カイロやイスタンブールにくらべると、味わいに欠けるという人がいる。街路が整然と区画され、町自体の歴史が、二〇〇年も経っていないので、このような指摘もあながち否定できない。だが、下町が残す一九世紀的な情緒は別である。

私は、その雰囲気が好きで、足繁く通ったものである。フェルドゥーシー通りを下りていくと、セパという広場の前に出る。この広場から南にひろがる地区が、一昔前の下町の核をなしていたところである。一九世紀には、城壁がぐるっと町を囲んでいた。その内にカージャール朝のゴレスタン宮とバーザールがあったのである。今、その城壁は跡形もなく、アミール・キャビール、レイ、モウラヴィー、シャープール、セパの各通りに変ってしまっている。

バーザールは、いつ行っても人で雑踏をきわめている。アーケードは奥に深く、横の長さもある。全体にいくらか

変形の四角のかたちである。このように一つの町をなすほどボリュームのあるバーザールは、テヘランとタブリーズくらいのものであろうか。他の都市のバーザールは、アーケードがくねくねと続き、両側に店が並ぶ、イスファハーンのバーザールのようなタイプが多い。

テヘランのバーザールは、カイロのハーン・アル・ハリーリー、イスタンブールの「香料市場」、カパル・チャルシュと違って、都市経済の中に今でもしっかり根をおろしている。オリエント趣味にあふれた伝統的な手工業製品だけが売られているのではない。家庭の電化が、最近の趨勢とみれば、電気釜をすばやく並べて、客の需要にどんどん応じていく。バーザールは、一九世紀的な外観を呈しながら、その実、経済の流れを敏感にとらえて、伝統的体質を柔軟に変化させているのである。

バーザールの、中央の入口付近から北に走るナーセル・ホスロー通りは、一九世紀にバーザールがあったところである。昔はここに堀割があり、その両側にハンダクのバーザールがあった。しかし、ここは新しい時代の波に押されて、旧来のバーザール形式をやめ、近代的な店舗形式による経営に変えてしまった。バーザールの北側にあるボザルジョメフリー、東側にあるシールースの各通りも同じように装いを改めた。つまり、テヘランのバーザールは、形態の上で一九世紀のバーザールの外観を残しながら、その周囲に二〇世紀以降、近代的な店舗を発達させたということができる。

今、バーザール地域を歩いてみて面白いと思うのは、バーザールの内より、むしろ北側のナーセルホスロー通り周辺である。あたりは、なんとなくすえた臭いが漂い、道ゆく人々も、洗練されたところがない。この近くは長距離バスの発着所があちこちにある。地方から上京してきた農民や遊牧民でごった返している。むせかえるような熱気、賑やかさはここならではのものである。

バーザールは、カージャール朝が一八世紀末にテヘランを首都に定め、都市建設をはじめたとき、最初につくった城壁の内にあった。ところが、一九世紀後半になって、テヘランは第二の都市発展期を迎える。首都としてのテヘラ

ンの行政機能が高まり、貿易・交通の面でテヘランが、タブリーズ、イスファハーンを凌ぐようになると、地方から人々が急速に移り住むようになってきた。ナーセル・オッ・ディーン・シャー（一八四八～一八九六）は、このような人口増加にたいし、テヘランの市街地を拡大しなければならなかった。彼は第二の、外城ともいうべき城壁を建設した。この城壁は、一九二〇年代にレザー・シャーの命令で撤去されたが、今のシャーレザー、シャーナズ、シューシュ、シェショメ・バフマンの各通り付近にあった。この市街地拡大によってバーザールの重要性は低くなった。セパ広場より北側の地域が、新しい商業の中心地として出てきたのである。

一九二六年にギルド法、一九三一年に専売制がレザー・シャーによって実施されると、バーザールの比重は決定的に低下した。新しい下町の商店街が、イスタンブール街周辺に近代的な店舗のかたちで勃興してきたのである。

テヘラン市内でイスタンブール街というのもおかしな話だが、この名の由来は、通りの入口の角に一九世紀、オスマン朝の大使館が設置されたことによるのであろう。これは今、トルコ共和国大使館の敷地として残っている。このあたり、一九世紀のイランと外交・貿易の上で密接な関係をもっていた国々の大使館が多い。トルコ大使館の斜めむかいにイギリス大使館の広大な敷地がある。そのすぐ北にイギリス大使館の敷地の一・五倍もあろうかと思われる旧帝政ロシア・現ソビエト大使館がある。ドイツ大使館は、トルコ大使館の南に隣接している。

このようにイスタンブール街の周辺に有名国の大使館が立地していることと、イスタンブール街の近代的な商店経営が興ってきた背景とは決して無関係でないだろう。イギリス、ロシアのイランへの経済進出、それに伴う貿易構造の変化にすばやく対応した新興商人層が、下町北部に新しい商業中心地を形成したと考えられるからである。

イスタンブール街周辺の商店街は、まぎれもなくバーザールに代る現代の下町の中心である。この商店街は、現在イギリス大使館とトルコ大使館を挟むかたちで、十字に交差した東西南北の通りに沿って発展している。南北にフェ

ルドゥーシー通りが走っている。交差点にいたる北側の通りは、高級絨緞屋、骨董屋が多い。南側はイラン国立銀行の本店、金融機関のビルが立ちならぶ。

東西に走る通りは、西から挙げるとシャー、ナーデリー、イスタンブール、シャーアーバードの各通りである。この通りが、一九〇六年の立憲革命のあと開設されたマジュリス（イラン国民議会）の建物につきあたって終っていることは象徴的なことである。この商店街のエネルギーが、国民議会開設の大きな原動力となったことを彷彿させるからである。東西の通りのなかで、イスタンブール街は、常に庶民で溢れている。金銀細工屋、宝石店、洋品屋は派手な飾りつけで道ゆく人を店に誘いこむ。

ラーレザール小路という名を聞くと、テヘランに住んだことのある人なら、きっと懐しさでいっぱいになるだろう。ここは、イスタンブール街をちょっと脇に入ったテヘランの娯楽街である。浅草六区に雰囲気が少し似たこの通りには、映画館と大衆演芸館が密集している。歩いていると、人気女性歌手ゴゴシュの歌が聞こえてきたりする。ここは、享楽文化が少いテヘランで気のまぎれる、ほとんど唯一のところである。しかし、そのゴゴシュの歌もイラン革命後、革命評議会の通達で禁止されてしまった。

私は、よく、このラーレザール小路に映画を見に行った。五〇リアルの安い料金でイラン映画を息抜きに楽しむことができたし、なによりも、ペルシャ語に耳で慣れることができたからである。

内容は画面からだいたいの見当がついた。テーマは、イランにおける現実のシビアな男女関係を反映していて、恋愛への憧れであったり、恋愛がひきおこす深刻な波紋であったりする。享楽的性格の濃いものであれ、真摯な製作態度の社会性の強いものであれ、どちらも、イラン人の屈折した翳りがあらわれているように思う。

＊　＊　＊

テヘランの町でアルメニア人は床屋、アゼリー（アゼルバイジャン出身のトルコ系住民）は、八百屋を業とする者が多いといわれている。

イランは、イラン系の住民だけで構成されている国でな

い。トルコ系住民は、総人口の¼に達するし、アルメニア人、ユダヤ人、アラブ系の住民も多い。しかし、テヘランにいると、民族、言語、宗教、生活様式、社会組織の点でイランが抱えている複雑さをつい見落してしまう。テヘランは四五〇万の人口を擁し、イラン全体の一三%以上の人間が住む都市であるにもかかわらず、その性格は画一的で、没個性化が進んでいる。

ところで、イランにバザルガン政権が成立したあと、革命勢力内部でホメイニ師のシーア派グループと左翼諸勢力との間に深刻な対立が生じてきていることは、周知の事実である。しかし、これと並行して、もう一つ別な問題が出てきていることは、案外、注目されていない。少数民族の自治権要求の動きである。二、三の例を挙げてみよう。イラン東南部・パキスタン国境地方で遊牧するバルーチ族の一方的な独立宣言、北東部・ゴルガン地方にいるトルコマン族のゴンバデ・カーブース市での反乱、西部のイラク・トルコ国境地帯にいるクルド族のサナンダジ兵営の占拠などがそれである。

パーレビー体制下で圧殺されていた少数民族の自治権要求の動きが、ここにきて一挙に吹出たことは明らかである。この問題の政治的背景を歴史的に詳しく書く余裕はないが、地方旅行の印象から思いついたことを述べてみよう。

少数民族問題は、第一に民族、言語の問題が背景にある。イランにはペルシャ語を日常言語としないトルコマン、アゼリー、カシュガーイー、アフシャールなどトルコ系住民が多い。イラン系でも部族生活をしている住民は、近代ペルシャ語と懸離(かけ)れた言葉を使っている。バルーチ、クルド、バフティヤーリー、ロル等の諸部族の言語は、近代ペルシャ語の方言という程度の差でない。クルド語は、古代においてペルシャ語と同じ「イラン諸語」のグループをつくっていたが、時代が経つにつれ古代・中世ペルシャ語が音韻、語形を変化させ、アラビア語の語彙を大幅に借用して近代ペルシャ語に変ったので、クルド語との開きが大くなったのである。

第二の背景は、生活様式の違いである。少数民族は、そ

のほとんどが遊牧を生業とし、部族が、かれらの社会組織となっている。この中で例外はアゼリーである。アゼルバイジャンには、シャーセバン族のような遊牧民もいるが、アゼリーは、大部分、農業、定住生活をしている。

第三の背景は、少数民族の居住地がイランの中で比較的豊かで、それがかれらの自信の裏づけになっていることである。遊牧地として牧草に恵まれているだけでない。農地としても地味がよく、決してイランの後進地ではない。私は、秋色深いアゼルバイジャンを旅行したことがある。テヘランから西へ、ガズヴィンまで褐色の荒れた土地の続く風景が、アゼルバイジャンに入るとがらっと変ったのを覚えている。モンゴルの旧都ソルターニーヤを過ぎるあたりから、土の色が黒くなる。牧草は、青々とのび、ポプラは風にそよぐ。ザンジャンからタブリーズにかけては途中、キジル・ウズン河が流れ、いかにも豊かで潤いがあった。

カスピ海東南岸のゴルガン地方に行ったときも同じような印象をうけた。エルブルズの山々がカスピ海の近くまで迫る、狭長なマーザンダランの米作地帯を抜けてゴルガンに近づくと、緑豊かなトルコマン・ステップがひらけてくる。野菜畑が視野をさえぎることなく続き、この地方に近年、企業的大農経営が導入された理由が分るような景観である。

クルディスタン（クルド人の住地）も史料で頭に描いていたイメージと違って豊かなのに驚いた。イラク国境の町・ケルマンシャーから北へ、サナンダジへ向う途中は、クルディスタン特有の山地であった。だが、ザクロス山塊の西麓の水を集めた川が谷あいを流れ、土は黒く地味は豊かそうである。時々、牛に犁をひかせた農夫が畑を耕していた。

クルド問題は、イラン国内でもっとも深刻な少数民族問題となっている。これは、クルドの居住地がイラン、イラク、トルコの三国にまたがり、それぞれが民族の自決を主張しているからである。イラクでは北部のキルクークの油田をバックにクルド人が独立の要求を揚げ、トルコでは表面化していないが、東部アナトリアにおいて根強い反政府感情がくすぶりつづけている。

もっとも、同じクルド人でもそれぞれの国の状況によって社会組織、生活感情が異っている。トルコで会ったクルド人は、部族生活を捨てて、すっかり都会の生活に融けこんでいた。トルコ人と同じで人が好く、陽気で気さくなところがあった。山岳遊牧民の猛々しさは消えていた。東部アナトリアのクルド人の町・ディヤールバクルでのことである。日曜日のことであっただろうか、私は、ムスタファ・ユルナズ君という中学生に案内されてクルディアン・ダンスを楽しむ集りに連れていってもらったことがある。太鼓と笛の音に合わせて身体を微妙に震わせ、巧みにリズムをとって踊るクルド人の表情に何の屈託もなかった。

イランのクルディスタンの首邑サナンダジの雰囲気は、トルコとくらべるとずっと重苦しい。剽悍な顔つきをしたクルド人が、裾のだぶついた民族衣裳に身をかため、刺すような険しい目で突然の闖入者である私を遠まきに見つめていた。サナンダジで感じたクルド人の近寄り難い、無表情な眼差しは、かれらが部族社会からぬけでていない未開さに原因するのでなく、かれらが置かれている厳しい状況を表わしているものでなかろうか。

イラン革命後、パーレビー体制下で非合法とされていたクルド民主党がいちはやく復活した。自治権を主張し、積極的な活動をはじめている。このような動きにたいして、クルド族出身のサンジャビ外相（国民戦線指導者）、アルダラン経済相を閣僚に加えたバザルガン政権はいかなる対処をしようとしているのであろうか。

＊　＊　＊

以上、現代の少数民族問題から私たち歴史を研究しようとする者は、次の点を反省しなければいけないと思う。すなわち、イランの歴史像をイラン系住民の歴史だけで叙述していけば、それで事足りるのかということである。残された文献史料が、ほとんどペルシャ語であるからといって決して数の上ではマイノリティーといえぬトルコ系、クルド系住民の歴史を無視していいことにはならない。

そもそも、少数民族という規定の仕方がおかしい。現代のイランで自分の出自とか血とかに明確な意識をもっていることは事実である。アゼリーがもつトルコ系住民たるこ

との誇り、そして、その結果として出てくるイラン系住民にたいする反発があることもまた確かである。しかし、このようなみずから抱く少数民族意識と多数者であるイラン系住民が抱く差別観が、はるか昔からイランにあったとはとても思えない。これは、パーレビー朝成立後、レザー・シャーが鼓舞して概念化したアケメネス朝以来の伝統的なイラン民族主義という虚像が、新しく差別意識を醸成したと思われる。白色革命後、ペルシャ語による教育が普及・徹底すると、あらゆる面でイラン化が進んだ。アゼルバイジャンのタブリーズのようなトルコ系の中心都市ですら行ってみるとイラン化が浸透していて驚くほどである。

イランの歴史を一元的に解釈することも、またイラン系、トルコ系、クルド系と分けて考えることも間違っている。実際、イランは、部族・言語の面ばかりでなく、生活様式においても複合的な性格をもっている。この多様なイラン社会を総合的に掘りおこしていくことが、私たちの責任と思うが、えてしてこの点を忘れて一面的なイラン理解に終ってしまいがちである。パーレビー体制が確固不動のときは、近代化の視点だけで評価し、イラン革命については、これをシーア派による神の革命である、という一元的な宗教革命論で満足するところがある。確かにシーア派が今度の革命でイランの各層を組織することのできた唯一のものであることは否定できない。しかし、肝心なことは、イランが寄せあつめのモザイク社会であって、それぞれが組織する力をもっていなかったため、シーア派が組織原理として前面に出てこざるをえなかった現実である。

私たちは、シーア派という組織原理に目を奪われるだけでなく、それに頼らなければいけない多様なイランのモザイク社会の複合性を、より見きわめていくことが必要である。これが、イラン滞在の経験から得た私の卒直な感想である。

以上で私の簡単な報告を終ることにしたい。最後になったが、留学の機会を与えていただいた慶応義塾、および東洋史専攻のスタッフの諸先生に深く感謝の言葉をささげたい。また、テヘラン滞在中にお世話になった本田実信・京都大学教授、加藤和秀・東海大学助教授、清水宏祐・東京

外大ＡＡ研助手、テヘラン大学留学中の岩見隆、関喜房の各氏に御礼の言葉を申し述べたい。